

〈特集「ヴォイスとその周辺」〉

パピアメント語におけるヴォイスとその周辺

Voice and related expressions in Papiamentu

パトリシオ・バレラ・アルミロン

Patricio Varela Almiron

東京外国語大学大学院総合国際学研究科
Graduate School of Global Studies, Tokyo University of Foreign Studies

要旨：本稿の目的は、特集「ヴォイスとその周辺」(『語学研究所論集』第17号, 東京外国語大学) における25個のアンケート項目に対するパピアメント語のデータを与えることである。

Abstract: This report aims to provide the Papiamentu data which answers the 25 survey questions for the special volume of the *Journal of the Institute of Language Research* 17, which focuses on the cross-linguistic study of ‘voice and related expressions’.

キーワード：パピアメント語, クレオール言語, 受身, 再帰

Keywords: Papiamentu, creole, passive, reflexive

1. はじめに

パピアメント語は主にアルバ島, ボネール島, キュラソー島(3つの島の頭文字を取り「ABC諸島」とも呼ばれる)で話されているクレオール言語である。基本語順はSVOであり, 修飾語と被修飾語の語順は品詞(場合には語彙)によって異なる。本稿における表記はキュラソー島の正書法を採用している。

本稿の作成にあたり, J.C.氏(キュラソー島出身, 1990年生まれ, 男性)の協力をいただいた。

2. 言語データ

(1a) (風などで) ドアが開いた。 【自動詞と他動詞の対立】

E porta a habri.
ART.DEF door PFV open

(1b) (彼が) ドアを開けた。 【自動詞と他動詞の対立】

El a habri e porta.
3SG PFV open ART.DEF door

(1c) (入り口の) ドアが開けられた。 【自動詞と他動詞の対立】

E porta a wòrdu habrí.
ART.DEF door PFV PASS open.PSTPTCP



本稿の著作権は著者が保持し, クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

(1c') E porta a **ser** **habrí.**
ART.DEF door PFV PASS open.PSTPTCP

(1a)-(1b) のように **habri** 「開く・開ける」は自動詞としても他動詞としても用いられうる。受動態では受身を表す動詞 **wòrdu** もしくは **ser**¹ が用いられ、語彙動詞は過去分詞の形で現れる²。

(1d) ドアが壊れた。 【自動詞と他動詞の対立】
E porta a **kibra.**
ART.DEF door PFV break

(1e) (彼が) ドアを壊した。
El a **kibra** e porta.
3SG PFV break ART.DEF door

(1f) (入り口の) ドアが壊された。
E porta a **wòrdu kibrá.**
ART.DEF door PFV PASS break.PSTPTCP

(1f') E porta a **ser** **kibrá.**
ART.DEF door PFV PASS break.PSTPTCP

kibra 「壊す／壊れる」も同じように自他両方に用いられる。

(2) 私は (自分の) 弟を立たせた。 【自動詞からの使役, 他動詞からの使役】
Mi a **pone** mi ruman lanta para.
1SG PFV put 1SG sibling stand stop

(2') Mi a **buta** mi ruman lanta para.
1SG PFV put 1SG sibling stand stop

(2'') Mi a **laga** mi ruman lanta para.
1SG PFV let 1SG sibling stand stop

(3) 私は (自分の) 弟に歌を歌わせた。 【自動詞からの使役, 他動詞からの使役】
Mi a **pone** mi ruman kanta un kantika.
1SG PFV put 1SG sibling sing ART.INDF song

(3') Mi a **buta** mi ruman kanta un kantika.
1SG PFV put 1SG sibling sing ART.INDF song

¹ J.C.氏によると **ser** は主にアルバ島のパピアメント語で用いられるという。

² この2つの形式が Kouwenberg and Murray (1994: 37) でパピアメント語の受動態に用いられる補助動詞として挙げられている。

(3'') Mi a **laga** mi ruman kanta un kantika.
1SG PFV let 1SG sibling sing ART.INDF song

(2), (2'), (3), (3') では pone/buta 「置く」が用いられ、使役表現を作っている。J.C.氏によると、どれも「強制的にさせる」意味を表す。(2''), (3'')における laga 「放置する」を用いた表現は「強制的にさせる」というのが一番自然な解釈であるが、場合によって「許可」を表すとも解釈できる。

(4a) (遊びたがっている子供に無理やり)母は子供をパンを買いに行かせた。【強制使役と許可使役】
E mama a **pone** su yu kumpra pan.
ART.DEF mother PFV put 3SG.POSS child buy bread

(4a') E mama a **buta** su yu kumpra pan.
ART.DEF mother PFV put 3SG.POSS child buy bread

(4b) (遊びに行きたがっているのを見て)母は子供に遊びに行かせた。【強制使役と許可使役】
E mama a **laga** su yu hunga.
ART.DEF mother PFV let 3SG.POSS child play

pone/buta 「置く」を用いた使役は (2) と (3) の例と同じく「強制使役」として解釈される。それに対し、(4b) では laga 「放置する」を用いた表現は「許可使役」として解釈される。このことから laga 「放置する」を用いた表現は「強制使役」と「許可使役」の両方を表すことができ、その解釈はおそらく文脈などによって決まる。

(5a) 私は弟に服を着せた。【他動詞による表現と使役の違い、直接の行為か間接の行為か】
Mi a **bisti** mi ruman.
1SG PFV wear 1SG sibling

(5b) 私は弟にその服を着させた。【他動詞による表現と使役の違い、直接の行為か間接の行為か】
Mi a **laga** mi ruman bisti e paña.
1SG PFV let 1SG sibling wear ART.DEF cloth

(5b') Mi a **pone** mi ruman bisti e paña.
1SG PFV put 1SG sibling wear ART.DEF cloth

(5b'') Mi a **buta** mi ruman bisti e paña.
1SG PFV put 1SG sibling wear ART.DEF cloth

(5a) では bisti 「(服を)着る／着せる」が用いられ、ruman 「兄弟」が目的語になっている。J.C.氏によると、(5a) では「直接手を下して着せる」ことが含意されている。これに対し、「許可使役」の laga 「放置する」を用いた (5b) と「強制使役」の pone/buta 「置く」を用いた (5b') と (5b'') では「言語による命令など、間接的な行為である」ことが含意されている。

(6) 私は弟にその本をあげた。 【(物の) 授受動詞は恩恵の授受においても助動詞的に使えるか】

Mi a **duna** mi ruman e buki.
1SG PFV give 1SG sibling ART.DEF book

(7a) 私は弟に本を読んであげた。 【(物の) 授受動詞は恩恵の授受においても助動詞的に使えるか】

Mi a lesa e buki **pa mi ruman**.
1SG PFV read ART.DEF book for 1SG sibling

(7b) 兄は私に本を読んでくれた。 【(物の) 授受動詞は恩恵の授受においても助動詞的に使えるか】

Mi ruman a lesa e buki **pa mi**.
1SG sibling PFV read ART.DEF book for 1SG

(7c) 私は母に髪を切ってもらった。 【テモラウ】

Mi a **laga** mi mama korta mi kabei.
1SG PFV let 1SG mother cut 1SG hair

(7a)-(7c) から分かるように, (6) の授受動詞 **duna** 「与える」は恩恵の授受に用いることができず, (7a)-(7b) では前置詞 **pa** が恩恵の受け手を指す. それに対し, (7c) では授受動詞 **resibi** 「もらう」を用いず, 使役表現を作る **laga** 「放置する」が用いられる.

(8a) 私は (自分の) 体を洗った。 【再帰】

Mi a **laba mi kurpa**.
1SG PFV wash 1SG body

(8a') Mi a **baña (mi kurpa)**.

1SG PFV bath 1SG body

(8b) 私は手を洗った。 【再帰】

Mi a **laba mi man**.
1SG PFV wash 1SG hand

(8c) 彼は手を洗った。 【再帰】

El a **laba su man**.
3SG PFV wash 3SG.POSS hand

(8a-8b) では1人称単数の所有限定詞が用いられているため, 主語である1人称の再帰的動作であることが分かる. なお, J.C.氏によると, (8a) のような言い方がかなり不自然であり, (8a') のように **baña** 「シャワーを浴びる」を用い, 目的語を省略した言い方のほうが自然であるという. (8c) では3人称所有限定詞の **su** は主語と同一指示をしている.

- (9) (自分のために) 私はその本を買った. 【自利態】

Ami a kumpra e buki ei pa mi (mes).
1SG PFV buy ART.DEF book there for 1SG self

(9) では **pa mi** や **pa mi mes** という副詞句を用いて「自利」を明確に表すことができる. そのような表現を用いなくても「自利」として解釈できることがある. (9) ではいわゆる「強調形代名詞」の **ami** (非強調形は **mi**) が用いられている. J.C.氏によると非強調形を用いても「自利」の解釈に変わりがないが, 強調形を用いることによって, 「他人ではなく私が買った」という情報構造的な意味合いが含まれるという.

- (10) 彼らは (／その人たちは) (互いに) 殴り合っていた. 【相互】

Nan tabata dal otro ku moketa.
3PL IPFV.PST hit other with fist

(10) では相互を表す表現として **otro** が用いられている. 冠詞を伴った **otro** はふだん「その他 (の人・もの)」を意味する.

- (11) その人たちは (みんな一緒に) 街へ行った. 【衆動】

E hende=nan ei a bai kaya.
ART.DEF people=PL there PFV go street

- (12) その映画は泣ける (その映画を見ると泣いてしまう). 【自発】

E pelikula aki ta pone=bu yora.
ART.DEF movie here IPFV put=2SG cry

- (12') **E pelikula aki ta pone hende yora.**

ART.DEF movie here IPFV put people cry

(12) では **pone** 「置く」を用いた使役表現が用いられ, 2 人称単数の代名詞は総称として用いられている. J.C.氏によると, 総称的な意味をもつ名詞 **hende** 「人」も用いることができる.

- (13a) 私は卵を割った. 【意志／無意志】

Mi a kibra e webu=nan.
1SG PFV break ART.DEF egg=PL

- (13a') **Mi a kibra e webu=nan sin mi ke.**

1SG PFV break ART.DEF egg=PL without 1SG want

- (13b) (うっかり落として) 私はコップを割った／割ってしまった. 【意志／無意志】

Mi a kibra e kùp.
1SG PFV break ART.DEF cup

(13b') Mi a laga e kùp kai kibra.
1SG PFV let ART.DEF cup fall break

(13a) では他動詞が用いられ、行為が「意志」をもって行われたか否かに関して無標である。J.C.氏によると、副詞句を用いて「意志」があったか否かを表すことができる。例えば(13a')のように無意志に行われたことを示すことができる。(13b)でも他動詞が用いられ、行為が「意志」をもって行われたか否かに関して無標である。無意志に行われたことを示すのに、laga「放置する」を用いた使役表現が可能である。

(14a) きのう私はコーヒーを飲みすぎて（飲みすぎたので）眠れなかった。

Ayera mi a bebe asina tantu kòfi ku mi no por a drumi.
yesterday 1SG PFV drink like_that much coffee that 1SG NEG can PFV sleep

(14b) きのう私は仕事がたくさんあって（たくさんあったので）眠れなかった。

Ayera mi taba=tin asina tantu trabou ku mi no por a drumi.
yesterday 1SG IPFV.PST=have like_that much work that 1SG NEG can PFV sleep

(14a)-(14b) はどれも no por で「不可能」を表している。

(15) 私は頭が痛い。 【全体と部分・主体・一時的】

Mi tin dolo di kabes.
1SG have pain of head

(15') Mi kabes ta morde.

1SG head IPFV bite

(16) 彼女は髪が長い。 【全体と部分・主体・恒常的】

E tin kabei largu.
3SG have hair long

(15) と (16) では tin「もつ」を用いて部分が所有関係で表されている。J.C.氏によると (15') のような慣用的な表現も可能である。この場合は全体（1 人称）が所有限定詞でしか表されていない。パピアメント語の人称代名詞は基本的にそのまま所有限定詞としても用いられうる。そのため人称代名詞と所有限定詞の判別は主にその統語環境によるといえる。

(17a) 彼は（別の）彼の肩をたたいた。 【全体と部分・対象・接触／結果状態が継続的】

El a dal e den su skòuder.
3SG PFV hit 3SG in 3SG.POSS shoulder

(17b) 彼は（別の）彼の腕をつかんだ。 【全体と部分・対象・接触／結果状態が継続的】

El a tene su skòuder.
3SG PFV hold 3SG.POSS shoulder

(17a) では、最初の 3 人称代名詞と、目的語の人称代名詞および所有表現の人称代名詞は別の 3 人称に関係すると解釈される。行為の結果を被る部分は前置詞 **den** によって表されている。(17b) では所有表現の人称代名詞は基本的に別の 3 人称の所有物として解釈されるが、文脈によって再帰として解釈することも可能である。この場合は部分が目的語になっている。

(18a) 私は彼がやって来るのを見た。 【知覚構文】

Mi a **mira e yega**.
1SG PFV see 3SG arrive

(18a') Mi a **wak e yega**.

1SG PFV watch 3SG arrive

(18b) 私は彼が今日来ることを知っている。 【知覚構文】

Mi sa **ku e ta bini** awe.
1SG know that 3SG IPFV come today

(18a) と (18a') では従属節化などの標識が用いられていない。yega 「着く」の前に TAM 標識³が用いられていないことから、e yega が不定形節になっている、もしくは先行する動詞の TAM 標識の範囲に含まれていると考えられる。これに対し、(18b) では従属節化標識の ku が用いられており、従属節内部の動詞が TAM 標識を取っている。

(19) 彼は自分（のほう）が勝つと思った。 【引用文中の再帰】

El a **pensa ku e (mes)lo** a gana.
3SG PFV think that 3SG self IRR PFV win

(19) では従属節における 3 人称主語が、再帰を明示する標識 mes がなくても主節の 3 人称と同一指示であると解釈できる。J.C.氏によると、文脈によって従属節の 3 人称主語が主節の主語とは異なるという解釈も可能であるが、同一指示の解釈が一番自然であるという。

(20a) 私は（コップの）水（の一部）を飲んだ。 【部分的に及ぶ動作と全体に及ぶ動作】

Mi a bebe (**un tiki**) awa.
1SG PFV drink ART.INDF bit water

(20b) 私は（コップの）水を全部飲んだ。 【部分的に及ぶ動作と全体に及ぶ動作】

Mi a bebe (**tur**) e awa.
1SG PFV drink all ART.DEF water

(20a) と (20b) の「全体に及ぶ行為」と「部分に及ぶ行為」の違いの決め手は定冠詞の有無である。

³ テンス・アスペクト・モダリティのカテゴリを表す標識である。特定の有標な文脈がない限り基本的に必須である。なお、状態動詞のうち、一部の TAM 標識を取ることができないものがある。

定冠詞が用いられていない (20a) は部分を表すと解釈される。定冠詞が用いられている (20b) は全体を表すと解釈される。J.C.氏によると、「一部」や「全部」を表す副詞は任意であるという。

(21) 彼は肉を食べない。 【恒常的な否定文】

E no ta kome karne.
3SG NEG IPFV eat meat

(21) では未完了の標識 **ta** が用いられている。**ta** は後続する動詞の語彙アスペクトにより「継続」, 「習慣」, 「未実現の動作」を表しうる。否定要素である **no** の統語位置は決まっているため、恒常的な動作とそうでない動作の否定は同じ統語構造となる。

(22a) 今日は寒い。 【感覚述語・非人称文／感覚主体の存在が感じられない、より客観的な表現】

Awe ta friu.
today COP cold

(22a') Awe ta hasi friu.

today IPFV do cold

(22b) 私は (何だか) 寒い (私には寒く感じる)。 【感覚述語・非人称文／斜格主語】

Mi ta sinti friu.
1SG IPFV feel cold

(22b') Mi tin friu.

1SG have cold

(22a) コピュラ **ta** を用いた文になっており、主語の位置に **awe** 「今日」が用いられている。(22a') のように **hasi** 「する」も用いることができ、J.C.氏によると「話者が寒さを感じている」という意味合いが含まれるという。(22b) と (22b') では1人称代名詞 **mi** が用いられ、状態が **tin** 「もつ」と **sinti** 「感じる」に後続する名詞によって表されている。

(23) 人がとても多かったことに私は驚いた。 【(感情主体が受動的である) 感情述語】

Mi tabata sorprendi ku taba=tin tantu hende.
1SG COP.PST surprised that IPFV.PST=have much people

(23) では形容詞 **sorprendi** 「驚いている」が用いられ、驚きを引き起こしたものが補文で表され、**tin** 「もつ、ある、いる」によって導入されている。

(24) 雨が降り始めた。 【現象文・現場での直接体験】

Awa a kuminsá kai.
water PFV start fall

(24) では「雨 (水)」という名詞が主語の位置に立ち、開始相を表す動詞 **kuminsá** 「始める、始まる」

が語彙動詞の kai 「降る」に先行する。このように2つ以上の動詞が無標の形で連続する構造がパピアメント語に多く見られる。

(25) この本はよく売れる。 【中間構文】

E buki aki ta bende bon.
ART.DEF book here IPFV sell good

(25) では売られるもの (e buki aki 「この本」) が主題として文頭に現れている。

略号一覧

1,2,3	1,2,3 人称	PASS	受身
ART	冠詞	PFV	完了
COP	コピュラ	PL	複数
DEF	定	POSS	所有
INDF	不定	PST	過去
IPFV	未完了	PTCP	完了
IRR	非現実	SG	単数
NEG	否定		

参考文献

Kouwenberg, Silvia and Eric Murray. 1994. *Papiamentu (Languages of the world/Materials 68)*. München: Lincom Europa.

執筆者連絡先 : varela.almiron.patricio.o0@tufs.ac.jp

原稿受理 : 2021 年 1 月 13 日